トミー坊や

柳平： 脳障害児が、正常な子供以上に育っていく経過についてうかがいたいと思います。ここに、『ドーマン博士の幼児開発法』（グレン･ドーマン著）という本がありますが、この中に、トミー坊やの話が出てきます。私は、この話に大変感銘を受けました。脳障害児トミー坊やの実例に沿って、お願いします。

ドーマン： この本のトミーの例は、大変面白いものです。トミーは中流以下の家庭に生まれ、父親は、小学校二年までしか教育を受けていません。母親は、中学を卒業した程度。トミーは出産の時に困難があって、帝王切開をして生まれました。トミーの両親は、貧しく、教育もありませんでしたが、トミーのことは、非常に愛していました。

トミーを最初に診断した脳外科の医者は、トミーの脳損傷は非常に大きいから、トミーは終生、施設に入らなければならないという診断を下しました。トミーの両親は、この解答に満足できませんでした。何か他の方法はないかと、2 年半、探し歩いたのです。もしも、魔法使いの医者がいて、「トミーは直りますよ」と言ったなら、トミーの両親は、必ず、そこへ出掛けたことでしょう。ですが、魔法使いの代わりに、トミーの両親は私のところへ参りました。

トミーが最初に来たときは、3 歳になったばかりで、全身が麻痺していました。もちろん、言葉は話せず、人間というより植物に近い状態でした。私は、トミーのためにプログラムを作って、両親に「1 日 10 時間こうしてやりなさい。1 週間休みなく続けるのですよ」といいました。トミーの両親は、とりつかれたように実行しました。

トミーが、3 回目の診察に来たときは、手で、はい回ることができました。トミーの両親は、非常に力を得、これから、何でもしようという気構えでした。トミーが 3 歳半になった時、パパ、ママと言うことができました。それから、母親はトミーに本を買って与えたのです！ これはちょうど、若い父親が、赤ん坊の息子に野球のバットを与えるようなものでした。

次の診察の時、父親は「トミーは絵本の中のアルファベットは

全部読めるんですよ」と言いました。私は、何の感情も表わさないで、「それは結構ですね。でも、私は、トミーが、もっとハイハイをするのが見たいのです」と答えました。

その次の診察の時、父親は、「トミーは、もう五冊も本が読めるんですよ」と言いました。その時も、私は、何の注意も払わないで、前回と同じことをくり返しました。

その次に来た時は、父親は、「トミーは、もう何でも読めるんですよ」といい、私は同じ返事をしました。父親は、もう我慢できません。そのうち、昼食が運ばれてきて、ハンバーガーとトマト･ジュースが、私の前に置かれました。父親は、怒っていましたので、「ドーマン先生は、ハンバーガーとトマト･ジュースがお好きです」と紙切れに書いて、トミーに読みなさいと言いました。トミーは、それをスラスラと読んだのです！　正直なところ、私は自分の耳が信じられませんでした。父親が、次から次へと、いろいろなことを書いていくと、トミーは、片端から読んでいきます。

私は、全く仰天しまして、父親に「なぜ、もっと早く教えてくれなかったんですか」と言いました。すると、父親は答えました。「私は、毎回言っているのに、あなたが聞かないだけです」。それは、全くその通りです。私は、早速、私のところで働いている人びとを、みんな呼んで、このことを説明しました。一生懸命に説明している間、トミーは、うしろの椅子で、「リーダーズ･ダイジェスト」に読みふけっていました。

トミーは、今、たしか 12 歳から 14 歳の間だと思います。私が最後に会ったのは 2 年前です。トミーは、アメリカで聞かれた大きな会議で演説したのです。米国の副大統領の演説のすぐあとで、4 千人の聴衆に向かって演説しました。壇上には、マイクロフオンが立ち並び、ライトがこうこうと光っていました。そこで、トミーは、立派にやりとげ、トミーは非常に重い脳障害があったということが説明されました。通常の子供でも、10 歳やそこいらで、4 千人の聴衆を前にして演説のできる子供は少ないでしょう。